

平成19年度 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 公開講座募集要項

主催：名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本語の魅力

書店に足を運ぶと日本語についての関心が近年とみに高まっているように見うけられます。しかし、毎日親しく使っているのに、箸を使ったり車を運転したりするような無意識の活動となっていて、意識的な考察を加えることはほとんどないのではないのでしょうか。日本語に対する関心が高まっているこの機に、言語学、日本語教育、文化研究、認知科学などの専門家に、日本語という言語について、様々な角度から論じてもらい、その魅力を再認識されてみてはいかがでしょうか。

6月13日(水)第1回	開講式 大学院国際言語文化研究科長 吉村 正和 ■日常言語に潜む比喻：言語と認知 キーワード：比喻、メタファー（隠喩）、シネドキー（提喩）、メトニミー（換喩）、認知 私たちが日常使っている日本語の表現には、本来の意味とは異なるもの、すなわち比喻（大きく3つに下位分類できる）がたくさんあります。「才能が花開く」などはメタファー、「卵を買ってきて」（「卵」が「鶏卵」を表す）などはシネドキー、「黒板を消す」（「消す」のは「黒板」ではなく「黒板に書かれた字など」）などはメトニミーに基づくものです。この種の表現について検討するとともに、その認知的基盤についても簡単に論じます。	教授 靱山 洋介
6月15日(金)第2回	■戦後詩における比喻表現の高度化と秘教化—その多様化の軌跡を概観して キーワード：戦争体験の克服と「荒地派」の詩人たち、過渡期的問題性とレトリック、感性の解放と「日常詩派」の台頭、比喻表現の高度化とその諸相、「現代詩」の読み方 第二次大戦の終結からこの方、もはや60年以上もの歳月を閲するに及び、あれほど痛い目をみたまはらずの焼け跡・闇市の光景も、大方の日本人にとっては、すでに茫々の彼方へと沈み込んだものとみえて、何かといえば、とかく戦後体制の清算が声高に叫ばれるようになってきている。むろん、そのことには、半可通の危うさがつきまとう。同じように、戦後詩の歴史を紐解いても、その詩業は今や歴大な量にのぼっており、単に俯瞰するというだけでも、なまかなことでは容易に叶うことではない。今回の講義では、一般にさほど親しまれているとは思われないような作品にも眼を届かせながら、「現代詩」にみられる主題の多様化、技法の複雑化、比喻表現の高度化と専門化といった論点をめぐって検討してみたい。それは、同時に、詩作品はいうにおよばず、そもそも言語表現それ自体を、読んで理解するとはどういうことなのかを考えてみようとするということでもある。	教授 柴田 庄一
6月20日(水)第3回	■インターアクションから学ぶ日本語 キーワード：インターアクションと文法、会話分析、語用論、談話標識 私たちが生きていく限りインターアクション（相互行為）は存在する。インターアクションを進行する上で、「ことばのチカラ」は最も最適な媒体である。本講座では「辞書には載っていない、相互行為の中で初めてそのチカラを発揮する日本語（ことば）」に焦点を当てる。一つは「はい・うん・そう」「あ」などのいわゆる感動詞・間投詞や「よ」「ね」などの終助詞のチカラについて。「あ」でどんなことができるのか？「はい」はいつでもYesなのか？もう一つはインターアクションの「単位」について。発話の単位は「文」で区切れないと言われる。では最小単位は何なのか？最大単位は？実在の談話（演説、討論、漫才、世間話など）を題材にこれらについて先行研究とともに考察する。	講師 池田 佳子
6月22日(金)第4回	■日本語の形式名詞の諸相 キーワード：形式名詞、意味の希薄化、文末表現 「もの」、「こと」、「ところ」などの日本語の形式名詞は、実質的な意味は希薄になっているものの名詞としての形式と働きを持ち、日本語特有の事態のとらえ方や切り取り方を反映しています。そして、これらは「ものだ」、「ものの」、「ことだ」、「ことがある」のような形で他のことばと組み合わせることにより、きわめて重要な文法上の役割を担っています。本講座ではこうした個々の形式名詞の用法の広がりを観察した上で、特に「ものだ」、「ことだ」などの文末表現に用いられる場合に焦点を当て、そこから垣間見える日本語の特質について考えたいと思います。	准教授 奥田 智樹
6月27日(水)第5回	■明治期の翻訳恋愛小説に見る恋の表現 キーワード：明治、翻訳、恋愛、男女関係、ロマンチック・ラブ 明治時代には様々なジャンルのヨーロッパ文学が数多く翻訳されましたが、なかでも恋愛小説の翻訳は日本語に新しい感性を吹き込む重要な契機となりました。ヨーロッパ的男女関係や恋愛慣習の描写が、まだ伝統的な文脈にあった日本語に置き換えられていく際に、日本人は何を受容し、何を誤解し、何を排除したのか、という問題について、明治二十年代の短編恋愛小説の翻訳を中心に考えてみたいと思います。	教授 前野みち子
6月29日(金)第6回	■スタンダード・ムーブメントと日本語教育のパラダイム変化 キーワード：スタンダード、ヨーロッパ言語教育共通参照枠、コースデザイン、シラバスデザイン 経済、政治、学術交流のグローバル化に伴い、外国語教育の世界においても多言語・多文化主義に基づく標準化の動き、いわゆるスタンダード・ムーブメントが進行している。これは外国語教育の方法や内容を拘束しようとするものではなく、外国語教育を設計し運営する際の共通の枠組みを提供しようとするものである。この講座では、日本語教育の立場からスタンダード・ムーブメントとそれが生み出す教育パラダイムの変化を検証する。	准教授 衣川 隆生
7月4日(水)第7回	■日本近代現代詩における雅語美文 キーワード：言文一致運動、韻律、大和ことば、定型詩 日本近代詩は西洋詩の翻訳から始まったと考えてよい。漢詩とも和歌とも俳諧とも異なる西洋詩に接してその中身内容だけではなく、外部である言語、文体、修辞、定型などを取り入れ日本語で詩を作ろうとした先人達の苦勞は大変なものだった。そのような試みがなされた時期が言文一致運動と重なっていたことも問題を複雑にする。本講座では近代詩と現代詩の歴史の中で雅語美文を極め修辞に凝る傾向とその反対に平易を追求する傾向が混在して発展してきた過程を俯瞰してみたい。	教授 涌井 隆

7月6日(金) 第8回	■ことばの不思議と学習の楽しみ キーワード：コミュニケーション、言語学習、外国語 「ことば」の構造は実に複雑である。その「ことば」を使って情報をやり取りする場合、理論的にはかなりの数の解釈の可能性が考えられる。しかし、発信側はそこから1つを選び、受信側も通常はそれと同じ1つを選ぶ。こうすることによりコミュニケーションが成立する。そして、このような、偶然に近い「一致」が日常的には常に生じる。これが「ことば」の不思議である。そしてここから、ことばを学習する楽しみも生じる。一致しない場合もときにはある。これが「誤解」である。本講座では母語話者間、異言語話者間のコミュニケーションについて考えてみたい。	教授 小坂 光一
7月11日(水) 第9回	■日本語教育のための日本語文法 キーワード：日本語教育、文法性判断、個人差 今回は「『期待されてならない』は正しい日本語か?」という留学生の質問をきっかけに、何が正しい日本語で何が間違った日本語かということについて考えていきます。講義は演習形式で行います。実際に日本語の文法規則を導き出すことにより、日本語文法を分析することの面白さを体験します。また、このことを通して、外国人に日本語を教えるときの注意点についても考えていきます。	准教授 杉村 泰
7月13日(金) 第10回	■日本語の移動表現 キーワード：物理的空間移動、主観的移動、類義、多義、比喩、捉え方 同一の移動事象でも、さまざまな形式によって表現することが可能である。その複数の移動表現の違いは何であろうか。また、我々が日常的に移動とは見なししていないような、目に見えない抽象的な物事や状態なども、移動事象を表すのと同じ形式によって表現される。そこにはどのような仕組みがあるのだろうか。言語表現の中でも極めて基本的なものの一つである移動表現を通して、我々日本語話者が外界の出来事をいかに捉えているかを考察していく。	准教授 鷲見 幸美
7月18日(水) 第11回	■知覚の偏り、判断の偏り キーワード：ヒト、赤ちゃん、言語、知覚、錯誤、誤解 人が持っている能力は、進化の結果として獲得したもので、身体との関係も重要だと考えられますが、ほとんどが脳で実現されていると考えるのが一般的です。このようなことを考える際に重要なことは、外界にあるものをそのまま捉えているとは言えない、偏りがあると考えないといけないことが多いということです。この点を、知覚から言語までを例に考えます。	教授 外池 俊幸
7月20日(金) 第12回	■明治翻訳語の面白さ キーワード：翻訳、訳語、社会、医学 1868年の明治維新は、日本が近代化し、また西洋化する出発点となった年である。中国と韓国の文化にどっぷり浸かっていた日本が、いきなり西洋の思想や制度を受容するには、多くの西洋語の翻訳が必要だったのであり、それが日本語になっていく過程は興味深い。政治経済用語から医学用語まで縦横無尽に語りたい。たとえば衛生という語の成り立ちから考えてみよう。また、憲法という語が、中国に逆輸出された経緯にも注意を払おう。	教授 福田 真人
	閉講式	大学院国際言語文化研究科長 吉村 正和

開催期間：6月13日(水)から7月20日(金)まで 毎週水・金曜日 全12回

開講時間：18:30～20:00

受講対象者：一般社会人、大学生、大学院生

募集人数：60名(先着順)

受講料：8,200円(「納入依頼書」により郵便局へ払込)

開催会場：名古屋大学 東山地区 文系総合館7階カンファレンスホール(会場案内図参照)

申込締切：5月31日(木)まで〔必着〕

申込方法：郵送に限ります。

受講希望の方は、募集要項に入っている「納入依頼書」により最寄りの郵便局で受講料をお支払い頂き、その受領証を、「受講票」の「払込受領書貼付欄」に貼り付けて下さい。(納入の際には、所定の手数料が必要となりますので、ご了承下さい。受講料が納入されていない場合は、受講は認められません。)

「受講申込書」に、氏名・年齢・住所・電話番号・職業を、「受講票」に氏名を明記の上、80円切手(返送料)を添えて郵便でお申し込み下さい。なお、封筒の表面左下に「公開講座受講申込」と朱書願います。

「受講申込書」の受付が受理された方には、受講番号を付した「受講票」を折り返し返送します。

要項の請求：募集要項の必要な方は、名古屋大学国際言語文化研究科棟1階の事務室まで直接お越し頂くか、または、返信用封筒(80円切手貼付のこと)を同封の上、下記申込先まで請求して下さい。

申し込みと：名古屋大学文系事務部教務・学生グループ(国際言語文化研究科担当)

問い合わせ先

住所：〒464-8601 名古屋市中種区不老町

TEL：052-789-5245・4833〔AM9:00～PM5:00〕

FAX：052-789-4873

ホームページ：<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/events/2007/kokaikoza-2007.pdf>

「受講申込書」及び「受講票」に記載される個人情報、当公開講座を運営するに当たり必要な業務を行うために利用します。それ以外の目的のために利用、又は提供することはありません。また、これら個人情報の管理や利用は「名古屋大学個人情報保護規程」に基づき適正に取り扱います。

会場案内図

文系総合館
会場：7階カンファレンスホール

大学院国際言語文化研究科

〔地下鉄を利用〕
 地下鉄名城線「名古屋大学」駅下車
 (1番出口へ)

〔市営バスを利用〕

市営バスの系統と行き先			
1	名駅17・名古屋駅行	4	八事11・島田住宅行
2	栄16・栄行	5	猪. 名・猪高車庫行
3	栄17・栄行	6	猪. 名・妙見町行
いずれも「名古屋大学」下車			

----- 切り取り線 -----

平成19年度 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
公開講座

受講申込書

日本語の魅力

受付番号	受付年月日
※	※

※の欄には記入しないでください。

フリガナ			
氏名			
年齢	才	性別	男・女
住所	(〒 -)		
	☎ () -		
電子メールアドレス			
職業			

平成19年度 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
公開講座

受講票

受講番号
※

※の欄には記入しないでください。

払込受領書貼付欄

のりしろ

氏名

※ここに「払込受領書」を貼り付けて下さい。

切り取り線